

## 巻頭言

国際教育センター長 五味政信

現在、国際教育センターが日々の業務を行なっている建物、「国際研究館」にセンターの前身である留学生センターが移ってきたのは 2000 年の 4 月であったから、今年でちょうど 15 年目を迎えることになる。この 15 年を振り返り、センターの今日までの発展の歴史を辿ってみたいと思う。

最初に、2000 年 4 月に国際研究館に引っ越してきた時の感激を思い出してみよう。

「(国際研究館の) 建物は煉瓦色スクラッチタイルの外壁が上品で、周囲の桜、赤松の大木の緑と調和している。建物の入口は 3 階までの吹き抜けとなっており、開放感を体いっぱいを感じながら建物に入ることができる。入ってすぐ左手には、留学生・日本人学生の交流の場、国際交流ラウンジが確保されている。多くの留学生、日本人学生が集い、語り合い、時に笑顔と歓声が拡がり、時にノートを広げて教え合う姿を目にする度に、この国際研究館が研究と教育、そして交流の性格をも兼ね備えた建物であることを再認識させられる。屋上には太陽光発電装置が設置されており、発電量掲示板がこの国際交流ラウンジの壁に掲げられている。『ただいまの発電量 6.3KW』などの文字が目に入ってくると、ささやかながら省エネ、環境にも配慮した建物であることを喜ばしく思う。1 階の CAI 自習室が本格的な稼働を開始すれば、言語関連分野を学ぶ大学院生と日本語を学ぶ留学生との交流も一層拡大、深化するものと期待している。」

(『留学生センター紀要』2000 年の巻頭言〈五味〉から)

1996 年に設置されて間もない留学生センターが、新しい建物に引っ越して来ての新たな息吹と意気込みが感じられる文章だが、ここに期待を込めて書かれている学生間の交流はこの 15 年間に後述するとおり確実に拡大することとなっている。

このうち、**日本語教育部門**では、留学生に対する日本語教育を着実に整備し、今学期ではレベル別・技能別の日本語科目を週 42 コマ開講し、どのようなレベルの、どのようなニーズをもった留学生にも対応することが可能となっている。その傍ら、日々の研究活動を教材開発に結びつけるという伝統が受け継がれ、社会科学系の高度専門日本語教材を中心とする『一橋大学学術日本語シリーズ』を第 12 巻まで刊行し、市販されているテキストも 3 冊ある(『日本法への招待』(2004、有斐閣)、『留学生のためのストラテジーを使って学ぶ文章の読み方』(2005)、『留学生のためのジャーナリズムの日本語』(2015)(いずれも 3A ネットワーク社刊)。また、2004 年度からは日本語・日本文化研修留学生(日研生)プログラムを新設して、日本を良く知るコスモポリタンの育成に力を注いできている。さらに 2005 年度からは本学大学院言語社会研究科内に設置された「日本語教育学位取得プログラム」に参画し、日本語教育者の養成にも力を注ぎ、これまでに 100 名余の修了生を世界に送り出している。また、2010 年度からは本学商学研究科 MBA コースの外国人留学生向け日本語集中プログラムの企画運営を開始するなど、その活動範囲を拡げてきている。

**留学生・海外留学相談部門**もその業務を拡大してきている。センター設立当初からの留学生修学相談業務(外国人留学生の相談に応じ問題解決を図る)、オリエンテーション業務(外国人留学生の適応上の問題を未然に防ぎ、異文化理解の認識を高める)に加え、海外留学や国際教育交流の理解を深めるための担当授業の延長線上に、「短期海外研修(豪州)」を 2006 年度に開始し、現在では豪州、中国、韓国への 3 プログラムを企画運営している。また、スペインへの海外インターンシッププログラムを 2009 年度から開始している。さらに、

2010年初頭からは海外留学相談業務(本学学生の短期・長期留学を支援する)が新たに加わり、昨年度の場合、留学に関する相談件数が全相談件数の約45%を占めるに至っており、本学学生の海外留学推進に貢献する活動を展開してきている。

2010年2月の国際教育センターへの組織改編において新設された**国際交流科目部門**によってHGP(Hitotsubashi University Global Education Program)は企画運営されている。2015年度には英語を教授言語とする授業科目を年間、約100科目提供している。2010年度の開始時には約40科目であったから、科目数は2.5倍となり、このような授業科目の充実によって、本年10月には約100名の留学生が本学に新たに入学することになっている。これらの新規入学の留学生が加わると、留学生数は800名を超え、学生総数の12%強を占めることになる見込みである。英語による授業科目数の増加が交換留学生数の増加につながり、それは本学学生の交換留学機会の増加にもつながるという好循環を生むことになっている。この好循環は、本学全体の教育研究と留学生支援体制への高い評価よることは勿論であろうが、HGP内のきめ細かい教育指導、質の高い初級日本語プログラム、スタッフの優れた企画運営力の成果にほかならないであろう。

以上、2000年以降、国際教育センターが現在に至った主な道程を振り返ってみた。これらの発展を支えてきた最大の要因は何であろうか。それは、センター所属スタッフの高い知のdiversityにあるように思う。最多の人数時でも専任教員8名、兼務教員6名ほどの小さな所帯ではあったが、センターに集った教員の深く広い知のdiversityと、そして、そのcreativityがすばらしかったのだと思う。『学術日本語シリーズ』の刊行を発想した時も、日研生プログラムを開始した際も、短期海外研修プログラム(豪州)を開始した時も、教授言語を英語とするプログラムHGPを設置した際も、「センター教員の、一橋大学における日本語教育と留学生教育・大学の国際化・日本人学生への国際教育などに対する並々ならぬ熱意と、世界の高等教育の潮流を読み解く感性、将来を見通す先見性」と、「スタッフの深く広い知のdiversity」が見事にかみ合って、本学の国際化に関して最先端を走るアイデアを提案し、そして一橋大学の国際化に革新をもたらしたのである。センタースタッフのアイデアから本学に必要な国際化に関する原則的考え方が生み出され、学内の隅々に発信され、今やその原則が全学の共通認識となりつつあるが、その過程こそがセンターのこの15年と重なっていると言えよう。

2015年3月末をもって兼務教員の三枝令子先生(法学研究科教授)が定年退職されました。三枝先生は1989年に着任されて以来、本学の留学生教育、日本語教育、大学の国際化に多大なる貢献をされ、長年にわたってセンターを支え牽引してくださいました。また、石黒圭先生(国際教育センター教授)が国立国語研究所に転出されました。石黒先生は1999年に当時の留学生センターに奉職され、本センターの屋台骨として日本語教育部門、上述の「日本語教育学位取得プログラム」を発展の道に導いてくださいました。お二人の先生方にセンターの教職員一同、心よりお礼を申し上げます。また、2014年9月1日付けで新見有紀子先生が法学研究科専任講師として着任され(高濱愛先生の後任として)、センター兼務教員をお引き受けくださっています。そして、2015年4月1日付けでセンター准教授として太田陽子先生が着任されました(石黒圭先生の後任として)。センターは現在、専任教員8名、兼務教員5名の13名体制となっています。

2015年7月